緋色の記憶

布袋しぐれ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
緋色の記憶

【Ｎコード】
Ｎ３８９０Ｚ

【作者名】
布袋しぐれ

【あらすじ】
突然失った幸せの日々。同胞たちは、すべて瞳を奪われ、殺された。その瞳のために、殺された。
闇市場で高値で取引される、『緋の目』のために。
許せない、絶対に取り返してみせる。
生き残った、私たちふたりにかせられた、使命。きっとこれが運命。

偶然の出会い

殺された、いなくなった、同胞たち。必ず、仇をとると、幼馴染は言った。必ずや、この同胞たちの目を、取り戻してみせると。

私たちは、特異な民族だった。感情が高まると、瞳が鮮やかな緋色に変化する。それゆえに、苦労することは多かった。闇市場でかなりの高値で取引されていたことは、周知の事実だったから。私たちは、自分の身を守るための、護衛術は心得ていた。この血は、途絶えさせてはならない。とても、小さな頃、そう長(おさ)は言っていた。記憶に残っている。

その翌日、私たちクルタ族の同胞たちは、目をひとつ残らず、奪われた。

目の前が真っ赤になった。生き残ったのは幸運だった。幼馴染と、たまたま少し山を越えた向こうに、出かけていたから。食料を、探すために。力が抜けたように、籠が手から滑り落ちた。

「・・・父さま・・・？」

「・・・幻影旅団の・・・・し・・・・」

「クラピカ？」

「くっそ・・・幻影旅団の仕業だ・・・・」

「・・・なんでそう言えるの」

「前に聞いた、長(おさ)からも・・・同胞が、襲われたと・・・・蜘蛛の刺青の入った、やつに」

「・・・それって・・・・」

「・・・ああ・・・そのときも、目は奪われていた・・・・居場所が、バレていたんだな」

「随分と、冷静ね」

「・・・いいや、冷静に見えるか？」

「分からないわ・・・私、もう目の前真っ赤だもの」
「私もだ」
「・・・クラピカ、私たち、どうすべきなのかな？」
「目を、取り戻そう」
深いため息を同時に、クラピカは小さく、それでも力強く言った。
次第に感情も落ち着いてきて、目の前がクリアになる。頭に血が上ったせいか、少しぼうっとするが。
「どうすればいい？」
「どうすればいいのか、分からない」
「・・・私、闇市に紛れ込もうか？」
「ば・・・そんな危険なまねをするなっ」
「うーん・・・でも情報は入れられるかもよ？その、幻影旅団？の情報も手に入るだろうし」
「何を考えているかと思えば・・・くだらないことを言うな」
「でも、それ以外に、方法ってある？」
「・・・それは」
「いいの、私なら大丈夫。クラピカの心配には及ばないわ」
「・・・心配はしておらぬさ」
「まあ、随分なもの言いね」
「クルタいちの術師が」
「護衛術だけれどね」
「・・・連絡は必ず、取り合おう。週に一回は、かならず・・・そうだな、ここで」
「・・・危険じゃない？」
「大丈夫なのだろう？」
「分かったわ、クラピカ」
「ああ」
「・・・ねえ、クラピカはどうするの？」
「私か？私なら心配ないさ。情報を集めるよ」
「・・・集める？」

「ああ」
多分、これがきっかけだっただろうな。
私たちはそれぞれ分かれて、この日以来、一週間ごとに会っては、情報を交換していた。最も、ほとんど収穫はなかったのだが。
しかし、その生活が数ヶ月続いた、ある日、会うことはなくなった。来る日も、来る日も待っても、クラピカは来なかった。何があったのか、聞く術もなく。私たちは、共に１７歳になった。

闇市場は、反吐が出そうなほど、気持ちの悪いもの好きの連中もいる。黄色の髪色に、茶色がかった瞳。この容姿だけでも、十二分に目立つというのに。クラピカに最後にあった日に、貰ったカラーコンタクトをいれていても、やっぱり目立つものは目立つ。
「お嬢ちゃん、君、いくら？」
「・・・売り物じゃないわ」
「機嫌が悪いね、どうかしたのかい？前の客の気前が悪かった？私はその１０倍はだそうか？」
「うるさないあ・・・売り物じゃないって言っているのが聞こえないの」
「ん？」
「こンのっ・・腐れ変態野郎！」
「うっがぅっ！？」
男の顎に蹴りを入れると、一瞬、顔が緩んだ。とんだ変態だったみたいだ。とりあえず、ひと安心。
「お見事」
「誰？仲間？」
「いいや。ボクはただの通りがかり」
「何？」
「素晴らしい蹴りだったね、何か習っていたのかい？」

「まあね」
「そうか、いつかお手合わせ願いたいものだ」
「（そんな真面目なヤツに見えない・・・）いいわよ、私はマリア」
「うん、マリアね。ボクはヒソカ」
「・・・ふぅーん・・・」
「それにしても、君、随分と若そうだけれど？」
「失礼ね、もう１７よ」
「ここがどこか分かってる？」
「分かっているわ。愚かじゃない」
「愚かじゃなかったら、ここにいないんじゃない？」
「事情って人によるでしょう」
「・・・うん、そうだね。気に入った。お茶でもどうだい？疲れただろう？」
「・・・いいわよ」

偶然って、本当に恐ろしいものね。

柔らかな微笑み

オレンジ色の、さらっとした髪を、風にたなびかせるのを楽しむかのように。かすかに、目を細めたように見えた。
重たげな二重が、ゆっくりと瞬きして、また私を捉えた。目の端とか、そんなんじゃなくって、きちんと。
「・・・何？」
「いいや、別に」
闇市場から抜けた、少し洒落たカフェテラスに座っていた。アンティークな椅子と、茶器。普段の生活からは程遠い場所だ。
「さっきから・・・何？」
「つれないなぁ・・・クックッ・・・」
「（気味悪いなあ）」
「・・・君、あそこになんで居たの？」
「言えない。企業秘密ってやつかしら」
「・・・企業？」
「（まずい）所属はないんだけれど」
「ふぅん」
「あなたこそ」
「ボク？ボク、暇だったから・・・変わったものでもないかなぁ・・・って」
「・・・娼婦（おんな）でも探してるのかと思った」
「ん～、そう見える？残念、かも」
「・・・そうには見えないけれど」
「まんざら、間違いでもないけれどね、ボク、変態らしいし」
「・・・昼間からジョークが過ぎるわ」
「よく仕事仲間に言われるんだよ」
「気にする必要もなくて？」
「・・・そう言ったの、君が初めてだよ・・・可笑しい」

「・・・あらそう」
じっと食い入るように見られることは少ないからか、少し変な感じがする。
「元は良いのに」
「え？」
「ううん、なんでもない」
「顔に何かついてる？」
「そういうのじゃないよ、気にしないで」
「・・・気になるわ」
「君、元は良いのに。飾らないのかい？それくらいの歳だろう？」
「うーン・・・気がついたら、この歳って感じだから・・・分かんないなあ・・・」
「そっか・・・」
「何？」
「いいや」
そういうと、ヒソカは初めて、まともに目線をはずした。初対面の男に、ここまで口を割ったのは初めてだったから、少し疲れた。
「あなた、いつまでいるの？」
「ん～？さあ」
「少し、寝ても良い？」
「今かい？」
「うん」
「ここじゃ、少し目立つからね・・・いいよ、寝てても。けれど、移動してても勘弁してくれるかい？」
「うーん・・・場所によるけれど・・・」
それよりも、眠たさのほうが、確実に勝っていた。
どうでもいいさ。成るようになるだろう。別に、危機感は感じないし。
私は、一気に眠りのふちに落ちた。

連絡が途絶えたのはいつだったか。いつかの日、確か、私はあの約束の場所に行けなかった。急な仕事が立て込んで、気付けば、日付もとっくに変わって。それ以来、会っていない。もう何ヶ月経っただろうか。確か、おとといは、彼女の誕生日であったはずだ。毎年、欠くことなく祝っていたのに。今年はできなかった。毎年、何かは贈っていた。小さい頃、初めて贈った、『白い花』。名前は知らなかったけれど、美しかった。小さく、可憐に強く咲くその姿に、彼女を重ね合わせていた。

「もう少し、別れる前、手段を選べばよかったな」

呟いても遅い。連絡手段を与える機会は何度もあったというのに。愚かな、自分。憎い、自分が。心配はどんどん積もっていく。

顔の筋肉が、硬くなりそうだった。

「クラピカさん、仕事」

「あ、はい」

目の前のことで、いつもみたいに手いっぱいだった。

目覚めた夜

カーテンの隙間から、夜の景色がのぞいていた。真っ暗な中に、かすかなネオンが光る。

赤いカーテンの部屋。はて、ここはどこだろう。身体を起こすと、悪趣味なまでに赤いベットシーツに目がいく。

「（ここは？）」

「おはよう、いや、こんばんは」

「どこ、ここ」

「ボクの部屋」

「あ、そう」

「今から、ボク、仕事だから」

「え？」

「寝ててもいいし、自由に使って」

「・・・いや・・・でも」

「誰か、待ってる？」

「いいえ、帰る場所はないから」

そう、帰るべき場所はない。今日だって、どこかで野宿か、安い宿を取るはずだったし。

「じゃあ、ね」

「・・・お言葉に甘えるわ」

「うん、良い子」

「・・・」

「しばらく居るといいよ」

「しばらく？」

「イヤになれば出て行けばいい」

「日数の話？」

「もちろん。好きなだけ、過ごせば良い。君に興味を持った」

「・・・娼婦じゃないわ」

「分かってるよ。ごめん、ごめん。じゃあ、ボクは一旦、仕事に行って来るから。朝になったら帰ってくると思うよ」
「分かったわ」
直ぐにヒソカは出て行ったようだった。扉の閉まる音が玄関のほうからした。
このベットはあの人と同じような、不思議な匂いがする。少し柑橘めいた、ミステリアスな香り。イヤじゃない。それよりも酷く落ち着いた。
「どうしよう・・・やることないし」
とりあえず、ベットから出ることにした。

あまりの仕事の多さに身が持たない。酷く、最近は疲れている気がする。仕事が終わると直ぐにベットに入って眠りにつく。シャワーを浴びるのも、最近は朝の日課になってしまった。面倒なのだ。夜はとにかく眠りたい。ハンターではないが、雇われの警備として名のあるグループの、ボディーガードをしている。
ふと、無作為においてあった新聞に目が留まった。『ハンター試験、今年も開始』
「・・・ハンター？」
前々から気にはなっていた。一体、どういうものなのか。一般人が立ち入り禁止の区域にも、ハンターなら入れるらしい。莫大な資産も手に入ることもあるとか、ないとか。とにかく、今より随分と生活がしやすくなるそうなのだ。
「・・・好条件なのだが・・・一体、どういうものなのか」
考えては見たが、今はそれより、眠たさのほうが確実に勝っていた。とりあえず、眠ってしまおう。今、考えるのは無理だ。
頭まで深く、布団を被り、眠りについた。

「今日、スーツ？」
「やあ」
「ヒソカ、趣味変わった？」
「いいや、ちょっとね」
「いいと思うけれどね」
シズクは小首をかしげながら、そういった。
「今日はどうするの？」
団員からの、何気ない問いに、クロロが静かに口を開いた。
「盗みにいく。ヨークシンシティにあるビルにある、翡翠の涙だ」
「翡翠の涙？」
「計画を説明する。よく聞いておいてくれ」
「はい」
幻影旅団が、ひと暴れする。まるで嵐の前の静けさのように、街はいつもどおり、ネオンも煌いていた。

久方ぶりの夢の中

あまりに深い眠りについていたせいなのか。久しぶりに、夢を見てしまった。

あれは多分、村のはずれにあった、池。美しく風にたなびく木々の陰。ああ、懐かしい。水のにおいも、何もかも、心地よく懐かしい。ああ、帰ってこれたのか。

村に戻ったら、先生のところに行って剣を教えてもらわなくっちゃ。ジュールたちに負けてる。早く、強くなって、一人前になりたいし。何より――――――――――・・・。

「クラピカ」

「・・・なんだ、いきなり・・・驚いた」

「驚かせた？ごめん」

「抜け出してきたのか？」

「お裁縫、苦手だもん」

「そんなの練習しなくては、うまくならないに決まっているだろう」

「そうだけれど・・・イヤよ、私も剣を習ってみたい」

「私たちの習い事だ。マリアはいけない」

「何でよ」

「私たちが剣を習うのは、守るためだ。マリアたちは、私たちに守られていればいい。それが私たちの幸せだ」

「・・・そう、悪い気はしないわ」

「素直ではないな」

「うるさい」

「戻ろう」
「ん？イヤよ、折角抜けてきたのに」
「どうやって？」
「”お腹痛い”って迫真の演技で」
「・・・あきれたものだ・・・」
「それで結構」
「・・・」
隣に黙って、また腰を下ろした私を驚いた目で見た。
「戻らないの？」
「いるのだろう、まだ」
「そうだけれど」
「剣の稽古は生憎、今、休憩中だ」
「休憩中？」
「ああ、怪我した」
「えっ・・・クラ」
「私ではない」
「・・・そっか」
「骨を折ったらしい。先生が手当てをしている、じきに終わるだろうが・・・まあ、いいさ」
「適当ね」
「マリアには言われたくないものだな」
私が笑ったように、そういうと、マリアはふてくされたように、そっぽを向いた。そういう顔も、可愛いと思い出した、最近。私の中にも、こういう感情はあったのか、と。妙にむず痒くって、恥ずかしくって。くすぐったかったけれど。
「失礼ね、本当に」
「・・・もう決まったのか？」
話題を、何気なく婚礼のほうに向けた。
私たちの民族では、女性は１７を迎えたら、嫁ぐのが決まりだ。嫁ぎ先も、星の導き、相性も最も良い相手のところに決まる。マリ

アの場合、少しはなれた丘に住む、アステカのところだった。今年で２５になる奴のところだ。
アステカは、少し口が重いが、剣は達人並み。先生の次に強いし、何より博学。それに、面白い人だ。私としても、それなら、というぐらいだった。
「決まったわ」
「嬉しく、なさそうだな」
「お兄ちゃんみたいに慕ってた人だもん。イヤだわ、関係が変わっちゃうの」
「大丈夫さ」
「・・・クラピカはいいよね、男の子だもん」
「・・・」
「心配ないじゃない」
酷く傷ついたように、笑う、マリア。痛々しかった。ごめんって、いえなかった。それどころじゃない、罪悪感と、嫌悪感が押し上げてきたから。
「マリア――――――」

「っ・・・」
息が苦しいくらい、つまっていた。一気に、溜まった息を吐ききると、肺が少し痛んだ気がした。
夢を見ていたらしい。あれは幼い頃の記憶。私たちがまだ、１６だったころの記憶だろう。懐かしい夢を見たものだ。
しばらく、マリアには会っていない。元気にやっているんだろうか。何も、憂いていないことを願うばかりだ。心配事は、彼女には似合わない。彼女には、そんな顔、してほしくない。
「マリア」
返事の返ってくるはずのない、名前を呟く。

すると突然に、扉が強く開かれた。
「クラピカっ・・・起きていたか、まずい、翡翠の涙が奪われた！追うぞ」
「はいっ」
会いたい――――――・・・たったひとりの同胞に。

夢を見た。とても懐かしい夢。駄々をこねていたあの頃。駄々をこねることも許されていた、守られていたあの頃。
「・・・懐かしいなあ・・・」
呟く、と不思議と、涙が出てきた。懐かしい、恋しい、戻りたい、帰りたい。お母さん、お父さん、クラピカ。会ってないね、とても長い間。会いたいよ、少しだけでも。連絡する術がないの。どうすればいいんだろう。会いたいよ。どうしても、会いたいよ。恋しさが、積もっていく。まるで、風に吹かれ、積もる落ち葉のように。積み重なっていく、感情。
赤いシーツが、さらに濃い赤に染まっていく。
視界が赤くなるのが分かった。ヒソカが戻ってくる前に、沈めなきゃ。忘れなきゃ。下手したら、殺されてしまうかもしれない。売られてしまうかもしれない。昔、この市場に出てきた頃は、よくあった。もうそんなのは、イヤだ。
鎮まれ、鎮まれ。忘れろ、忘れろ。大嫌いだ、この赤い目が。この目のために、殺された同胞。この目を持ったばかりに。苦しい、イヤだ。憎い、キライだ。
「戻って・・・」
苦しい。
こんなに目の赤い夜は、暗い同胞の瞳が嘆くようだ。私をただ見つめて、暗い瞳で。私を忘れてはくれないのね、同胞よ。

今、仇をうつからね。待ってて。苦しめないで。分かったから。
「戻って・・・」

「ただいま」
玄関から、そう呟いた。初めてかもしれない。マチがここに来たときすら、言わなかったのに。不思議な子だ、あの子は。
布団で眠る、マリアの傍のシーツは染まっていた。泣いたあとがある。涙の筋が、まだ、残っている。
「なにか、思い出した・・・のかな」
その頬を、さっと拭うと、静かにマリアは息をした。

優しくない朝日

日はまた昇る。希望の朝も、悲劇のあとの朝にも。同じように明ける朝が、あまり好きになれない。きっとあの日が、全てを決めてしまったんだろうね。本当なら、望むべき朝を、嫌ってしまうんだろうね。寂しい、性。

「・・・」

「やあ、おはよう」

「いつから、そこに」

「君の目が覚める、三時間前から」

「・・・暇じゃなかった？寝なかったの？」

「うん、まあね」

「変ね」

「よく言われるよ」

「・・・何？」

「なんでもない。朝ごはんにでもするかい？」

「ん～・・・ん」

「曖昧だね？」

「うん・・・あんまり食べるほうじゃないから・・・いいかなあ・・・って」

「ああ、なるほどね」

「・・・」

「ボク、もうすぐしたら、数日空けると思う」

「数日？」

「うん。もしかすると数ヶ月かもしれないけれど（家に帰る習慣なかったし）」

「何をしにいくの？」

「うん？君も行くかい？ハンター試験」

「ああ、ライセンスの・・・いい。いらないから」

「そ。まあ、いいけれど（そっちのほうが好都合かも）」
「ん」
「自由にしてていい。この部屋も、家も。帰ってくる保障はできないけれど」
「いいよ、私、放浪癖あるし」
「また君に会いたいからね」
「・・・」
「じゃあ、そろそろ準備していくよ」
「え？もうすぐって・・・そのもうすぐ？」
「ん」
「・・・ばいばい」
「ばいばい」
多分、言葉を失うってこういうことを言うんだろう。
しばらく、その場にぼうっと座っていた。

「ええっ、辞める？君の働きは十二分に評価をしたつもりだったんだけど・・・」
「そうではなくて」
「何がご不満なんだい？」
「ハンター試験を受けに行きたいので」
「クラピカ君？何も、全て投げ打つ必要は・・・」
「分かっています。けれど、片付けてから行きたいんです」
「・・・そうか」
「お願いします、ボス」
「うん、うん、分かったよ、了解した。受理することにする」
「ありがとうございます」
「その代わり」
「・・・はい・・・？」

朝が嫌いだ。人と別れるにしても、夜別れるより、朝別れたほうがこたえる。精神的に参る部分が、大きい。私は、ずっとそう思っていた。

背を押す人も、ものも、何もなくなってしまった今。私は、そう思っていた。

失うものなど、何もない。崖っぷちでいい。誰かがそういっていた気がする。もしかすると伝記か、何かかもしれないけれど。少なくとも、その言葉が、私をここまで生かせている。

今日、やっと。今朝、やっと。嬉しく思った。朝が来たことが。朝、その始まりのありがたさが。

『その代わり』

『・・・はい・・・？』

『絶対、受かって来い』

『はい』

『応援している。ああ、これは餞別(せんべつ)だ。持って行ってくれ』

『ありがとうございます』

『また、仕事をしたかったら、おいで』

『はい』

『いってらっしゃい』

『行ってきます』

こんなに満ちた朝があること、今日まで知らなかった。希望の朝なんていうのは、タイトルだけじゃなかったんだ。

「・・・行ってきます」

優しくない朝日（後書き）

どうしてもヒソカの会話文に、ハートとか、スペードとか入れるの面倒で・・・ごめんなさい。ご了承を。

奇術師のにおい

ヒソカからいつもしていた。クルタの最後の日のにおい。あの、村に帰ったときの、におい。無力感に、教われた。悲しい、におい。

ヒソカからは、その断片的なにおいがした。近づくたびに、脳の奥がしびれるような錯覚を覚える。それはどこか、悲しくて、懐かしい。あの幸せな記憶と、惨(むご)い記憶の断片が脳内を駆け抜ける。走馬灯みたいに。

ぎゅっと自分を抱きしめて。しっかりしなきゃって。いつまでも、あの男の帰りを待っているわけにはいかない。情報を探さなくっちゃ。それが本命だもの。私は、そのために生きているんだから。

最初から思っていた。４４番は、まずい。血のにおいを感じていた。

「クラピカｖｓヒソカ！」

審判役の男の、力強い始まりの合図で、幕を開けた。出来れば、この男と対戦したくなかった。あまり好ましい、対決ではなかった。望むといったら言葉が変だが、こんな試合は、望んでいない。

「イイよ、抜いて」

「・・・そのつもりだ」

トランプの、音がやけに耳に障る。集中したい。気をとられてしまう。私と、したことが。

「おっと・・・トランプは半分じゃゲームできない。君も同じだよ。それじゃ、つまんないから・・・しっかりしっかり持ってて」

「・・・失いはしないさ、絶対に」

「だとイイよね」

トランプが投げられた。ああ、馬鹿馬鹿しい。こんなのどう返っ

てくるか、分かりきってるじゃないか。どういうことだ。こんな分かりきった軌道で、投げてくるなんて。
それより何より、ずっと微笑を絶やさないこの男。押し殺してはいるものの、漏れ出す殺気は抑えきれないようだ。ひしひしと、目に見えない細胞一つ一つに確実に感じていた。
「イイこと、教えてあげようか」
「何だ」
「君さぁ、もう負けてるんだよね」
「なぜそういえるっ」
「フッフ・・・でしょ」
私が剣に目を向けたと同時に、そういった。ヒビが、入っている。さっきの分か。いや、違う。さっきの攻撃はこれが目的であったか。迂闊だった。
「1本でいい」
「・・・ねえ」
「何だ」
「ボク手加減してるんだけれど・・・抑えられなくなっちゃうよ」
「・・・だからどうした」
「ああ、たまらないね・・・またゾクゾクしてきちゃった・・・ああ・・・重なっちゃう・・・君、ボクの知り合いによく似ているよ」
頭の隅に、マリアが過る。昔、よく2人でいたら、見分けがつかないといわれたことがある。血は、そんなに近くないのに、なぜだか顔は、瓜二つなのだ。最も、今でも多分、マリアが髪を切れば、見分けはつかない程度だろう。少しマリアのほうが、小さいが。
「・・・」
「君によく似ている・・・声までも」
「だからどうしたっ」
「たまらないよ・・・彼女の戦い方を見ているようで」
「・・・っ」

やはり、勘違いではないかもしれない。ヒソカが言っているのは、紛れもなく、多分マリアのことだ。
目の前が真っ赤に変わる。
投げられたトランプが、そっくりそのそまま、ヒソカの肩に刺さった。
覚悟はしていたものの、やはり尋常じゃない。ヒソカの顔は、まるで狂気に歪んでいた。
でも、それとすぐに、さっきまでの顔に戻って、両手をあげた。
まるで降参でもするかのように、こちらに向ってくる。
『――――で、待ってるよ・・・それから・・・マリアも君も知り合い同士、かな。同じにおいがしたよ』
「・・・え」
「ボクの負けでいいよ。次で決めることにした。いいだろ、別に」
マリアが、ヒソカと接触している――――・・・？

待てないわ。待てないの。私のこの身は、ただクルタの復讐のためだけに。この心臓は動いている。また街にいかなくてはならない。行かなくては、ほしい情報も何も、得られない。
『お世話になりました』
紙切れをテーブルの上に残して、扉を閉めた。
さよなら、おかしな人。

意外な接触

仕事を預かった。よりにもよって、試験の帰りに。めんどくさいとか、思いつつもちゃんとしちゃうんだから。ちょっとお人よし過ぎるってもんかな。まあ、有料だけれど。

付き合いが長いから、仕方ないってとこもあるのかも。まあ気まぐれだし。何より、今は仕事も入ってなかったからね。でも、ライセンスも取ったことだし、さっさと仕事したいんだけれどなあ――――。

漆黒の長髪を揺らし、ひとりで闇市場へ出向いた。

ヒソカに、頼まれた。随分と久しぶりの依頼かもしれない。いや、初めてかな・・・分からない。まあ、いいや。今回は殺人じゃないから、断ろうかとも思ったんだけれど。随分とイロをつけてくれたから、やることにしたけれど。普段なら、伝言程度に、わざわざ動いたりしないからね。

『イルミ』

『何？』

『頼まれごとがあるんだ』

『何？』

『頼まれてくれないか？』

『内容による。殺人なら無論構わないけれど』

『ああ、殺人じゃないよ。悪いけれど。伝言してほしいことがあるんだ』

『専門外だけれど』

『できないわけじゃないよね？イロ付けとくから』

『どれくらい？』

『そうだね・・・うん、一旦、３００００。終わったら７００００支払うよ』

『う～ン・・・』

『伝言だからね・・・おそらく、家にはもういないと思うんだよ』
『家？』
『ボクん家』
『（近くに）家あったの？』
『失礼だなあ・・・まあいいや。うん、この前までは一緒に暮らしてたんだけれどね。多分、出て行ったと思うから。探してほしいわけ』
『いいよ、そこまで言うなら、分かった。で、何？』
『――――――・・・って伝えてほしいんだ』
『分かった』
ハンター試験会場から、真っ直ぐ向ってきたけれど。2時間もかかるとは思わなかった。僅かな空腹感を感じ始めた。そういや、随分食べてないか。さっさと終わらせて、何か食べよう。

あの、出て行った日から。情報はこれっぽっちも掴めなかった。約束の場所にも行った。けれど、クラピカは現れなかった。何となく、分かりきっていたことではあったけれど。頭の片隅、予測できたことではあったけれど。なんとなくの、虚無感。何もしたくなくなった。どこかで情報が出てこなくてもいいかなあって。そう考える一瞬はあった。けれど、それ以上に、夜毎必ず夢を見て。あの同胞たちが語りかけてくる。真っ暗な空洞で。そうして、苦しくなって。また歩き出すをやむを得なくなるのだ。
「そろそろ仕事探さないとなあ・・・」
「姉ちゃん、幾ら？」
「は？」
「いくらかって聞いてるんだよ。一回、だめか？」
「幾ら出すつもりだ？」
「額によるのか・・・手持ちはあんまりないからなあ・・・そう

だな、８００００くらいかな」
「結構。それならいい。相手にする気はない」
「・・・はっ、このア」
「じゃあ、俺が２００００００出そうか」
黒髪の、妙に目の大きい人。つややかな髪は、まるで女性のよう。しかし、それを十二分に否定できるだけの筋肉が、その身体に纏われていた。
「あなた？何？」
「伝言を預かっているんだ。少し時間がほしい」
「分かった。ごめんなさい、私、こっちの人と行くわ」
「・・・分かったよ」
軽い舌打ちを含んで、さっきの男はさっさと踵（きびす）を返した。
「じゃあ、場所を変えよう」
「お金は結構」
「要らないの？」
「いいわ。そういうつもりじゃなかったし。伝言料、必要？」
「貰ってるし、追加で貰う予定だから、いいよ」
「うん、そう」
割と近くの路地の裏に入る。途中、壁のへこみを撫でると、そこは朽ちた木の扉が取っ手をなくして隠れていたようで――――――気味の悪い音を立てて、開いた。
妙に薄暗い光が入り込んでいて、ほこりっぽくって、変な空間だった。
「ヒソカから、預かった」
「ヒソカ・・・」
「彼、君を知ってるらしいけれど、合ってる？」
「合ってるわ。マリア、私よ」
「うん、よかった。率直に言う。ヒソカの元へ帰って」
「何で」
「探してる、結構、真面目だよ。何があったか知らないし、知っ

たこっちゃないけれど。戻って、家で待ってるかも」
「そういう人なのかな・・・」
「多分、次は手段も選ばず、君を探し出すと思う」
「・・・」
「『言いたいことがある』って。直接、会って」
「・・・」
「一応、伝えたよ。俺も暇じゃないし、疲れたから」
「・・・」
「今から帰ったら、いるかもね。2時間ちょっと前に試験終わったから」
「・・・」
「帰ったほうが賢明だと思うよ。君が痛い目、あいたくないならね」
「痛い目？」
「昔かなあ・・・気に入った子がいたと思うんだけれどね・・・その子、割と直ぐに死んじゃったね」
「死・・・」
「本能的に狩っちゃったのかな・・・もしかしたら、熟れたのかも」
「・・・」
「良いこと教えてあげるよ。ヒソカは青い果実にしか興味ないんだ」
「・・・」
「まだ死にたくなかったなら、帰ることだね。まあ、言ったからね。あ、帰り道、分かる？」
「・・・うん」
「じゃあ、気をつけて」
「・・・」
「次、君の死体に出会わないことを祈るよ」
「・・・」

すっと、すぐに消え去ってしまった。
私はまるで、死の宣告を受けた、患者のような、気分に陥った。

そして再会の

この道を忘れたわけではなかった。格別に、ややこしい道でもない。見通しの悪い、見落としやすい道でもない。ただ、何気なく暗い気持ちに支配されて。あまり帰りたくなかった。

自分の気持ちに、後ろめいたなにかを感じている。現在、進行形で。脅しに、ひれ伏した様な、そんなわけじゃないけれど。

心のどこかで望んでる。ヒソカは何か、知ってるんじゃないかって。クルタのことも、クラピカのことも。何か、知ってるんじゃないかって。心のどこかで、その幻の現実を望んでいる。お願い、そうであってって。

ヒソカの家の前についた頃には、辺りは少し暗くなっていた。家の中から、小さな光が漏れていた。家の灯りはつけていないくせに、ランプの類はつけているらしい。全く、趣味の分からない男だ。

「ヒソカ」

「・・・おかえり、待ってたんだよ」

「・・・ごめん」

「食事の用意もできてる。食べよう」

「・・・うん」

「そんな深刻な顔しないで・・・毒なんて盛ってないよ・・・クックック・・・それともイルミになにか言われた？」

「・・・いいえ」

「そう」

嘘をも見抜きそうな顔をしている。思慮深そうな、瞳。

「ヒソカ」

「何？」
「言いたいことって、何？」
「・・・」
「・・・ヒソカ？」
「食事しながらにしよう」
「うん」
ヒソカに促されるがままに、テーブルにつく。ちゃんと用意された、温かな食事。なんとも、イメージ型破りな。
「そんなに意外だった？ボクだってちゃんとできるのさ」
「・・・意外よ、かなり」
「そうかい」
「・・・いただきます」
「どうぞ、召し上がれ」
それからしばらく、沈黙の後、ヒソカがぼそっと話始めた。
「君の、仲間に会ったよ」
「・・・っ！？」
「赤い瞳の、そう、確か闇取引されている目を持つ、部族だっけ？」
「・・・」
「生き残りはいないはずだったけれど・・・狩り残しがあったんだねえ」
「え」
「幻影旅団を追っているのかな？ならばやめたほうが良い。今の君なら、容易く折れてしまう」
「・・・折れやしないわ」
「いいや、折れるね。簡単に・・・」
「・・・すぐに死ぬって言いたいの」
「その通り。賢いね、君は」
「それだけが言いたかったの？」
「そういうわけじゃないけれどね、まあ、そういう感じかな」

「・・・仲間って言ったわよね・・・」
「ああ、金髪の、男の子さ。君に良く似た」
「・・・（クラピカだ）」
「確か、クラピカっていう」
「・・・」
「会う場所と日時を指定している・・・君もついて来るかい？」
「ええ」
「即答だね、良いよ」
「・・・ときどき、ヒソカは分からない」
「・・・そう」
「どうして、そう、お節介をやくの」
「ん？」
「お金の為、手段を人は選ばないわ」
「・・・何も聞いてないようだね？ボクには金も、女も、何も必要ない。ボクがしたいのは人殺し」
「・・・聞いたわ、その類なら」
「うん」
「・・・それでも、私を殺して、この目を売れば一生遊んで暮らせるかもしれないのよ」
「興味ないね」
「・・・それは本心？」
「意思を持った君になら、興味を持てるけれど・・・死んだ君には興味ない」
「熟れ切った、私にも」
「・・・（イルミ随分、余計に話してるようだなあ・・・）それは能力の話かい？」
「さあ」
「うん、熟れきったら、そうだね興味はもてないかも」
「殺してしまう？」
「君は分からない・・・どうだろうね・・・まだ分からない」

「・・・」
「君が選ぶと良い。良い事を教えてあげよう。ボクは君が想像しているよりもっと、残忍で、汚い人間さ。そのために、手段も選ばないからね」
「・・・誰だってそうだわ」
「・・・」
「誰だってそうよっ・・・私たちを滅ぼした、あの蜘蛛だって・・・手段は選ばなかった・・・村にいた全員の目を奪って・・・私は・・・」
「そうか、その生き残りが君たちふたり・・・かい？」
「・・・そう」
「ふうん（いい念の色・・・垂れ流してる辺り、修行すればきっと、とってもおいしくなるかも）」
「・・・」
うつむき加減の私を、ヒソカは笑みをたたえて、覗き込むように見ていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3890z/

緋色の記憶

2011年12月17日06時01分発行